



<論説>文化諸科学間の接点：
とくに経済学の立場から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 孝夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002107

文化諸科学間の接点

——とくに経済学の立場から——

西村孝夫

一 問題のありか

昨年朝日新聞紙上に内田義彦氏の「社会科学の分化と総合」と題する一文が寄稿されたが、これは近ごろ注目に値する提言であった(昭和四三年二月五・六日同紙夕刊)。また東大の中根千枝教授も同じような問題を最近の同紙でとり上げているが、これはイギリスの学界と比較したものである。内田氏によれば、社会科学の驚くべき細分化の結果、「社会科学が余りにも専門に偏っていて人を近づけない」傾向を生み出したが、それらを「結び合わせる総合の場がないのか、どう設定すればよいのか」という問題を氏は提起し、「社会の統一的把握」のためには、各専門家が「素人になっていくという努力」あるいは「しんどい覚悟」をもつとともに、「思想を通わせながら、テーマの設定と追求を共通に行なっていくこと」の必要性を説き、在来の様々の「総合研究」をむしろ「社会科学の進歩にとって害にこそなれ、プラスにはならない」と批判している。ステレオ技術と音楽との関連を比喻にとって巧みに説明されているこの提言には多くの示唆を含んでいる。ただ二つの点について欲をいわせてもらえば、一つは、中根教授も指摘するごとく「分り易さ」が専門を離れた「気易さ」や他部門への過剰サービスに通じうる危

険をもつのではないかという懸念であり、も一つは折角、社会科学諸部門間の総合の問題を提言するならば、社会科学のみに限定することなく、もう一步を進めて人文・社会科学間、リッケルトのいわゆる文化諸科学間の総合の可能性、さらには自然科学と文化科学との間の総合あるいは（もし総合が不可能とすれば）協力の可能性にまで問題を進めてもよいのではないかという疑念が起る。日本学術会議の構成を一覧してみても、第一部から第八部まで様々な分野が含まれており、構成そのものはいかにも便宜的の感を免れないが、しかし一応こうした学術会議に統括されいながら、諸科学間にどんな協力体制があるのかは、この会議の性格や役割が改めて問題になっている現時点で十分に顧慮されてよい問題であろう。なお、もう少し問題を拡げていけば、今日の大学制度内における専門科目と教養科目との学問的（制度的でない）連関いかなの問題もこの点に集約されるはずである。われわれは、経済学の中でも、とくに西洋（？）経済史という小さな一分野で仕事をしているにすぎないが、右の問題を考えてみる場合、自らの専門と他の社会・人文諸科学との接点の有無・所在を探究してみるといふ課題を設定する他はない。とくにわれわれが科学・政治・宗教・音楽・文学・美術等の観点から「近世ヨーロッパ文化の総合的研究」を現に志向しているので、その課題の必要性を日常痛切に感じているからでもある。この総合研究の過程に報告討論が行われる際に、われわれが感ずる一種のもどかしさも、実は右の課題が充分に考え抜かれていないことに基いているように思われる。

だが、文化諸科学の総合によって文化を全体的かつ統一的に把握することから人間の本質に迫ろうとすることがいかに大切であるかを知っていても、経済学の立場から見ると、この総合には大きな困難が介在するのを認めない訳にはいかない。それは科学の細分化の問題をこえる方法の上での困難を意味する。なぜならば、経済学においては、既に古くはマルクスによっても、「経済上の生産諸関係に起った物質的変革」が「自然科学的に忠実に

確認されらるる」naturwissenschaftlich treu zu konstatierenden (Kritik der politischen Oekonomie, Volksausgabe, S. 5.) という方法の把握

があり、またドイツ西南学派の文化哲学者リッケルトも、経済学は自然科学と文化科学との「中間領域」であるとし、自分の態度を保留しながらも、自然科学的な一般化的方法と文化科学の個別化的方法の両方とも、その中に存立しうると考える。彼のいうところによれば、「経済生活の動きが一般に孤立化されうる限り、……集団のみが問題になる。したがってこの文化科学(経済学)にとって本質的なものは、大ていの場合、比較的普遍的なある概念の内容と一致するであろうからである」

(「文化科学と自然科学」。岩波文庫一三五頁)

の趨勢は高度に数学的記号の利用を行う方向に傾いており、その意味でも自然科学的と名付けてよい性格を益々強くしているといえる(拙著『経済学体』系と歴史参照)。これらの場合における「自然科学的」のそれぞれの意味は明白に異つて

いるが、要するに「経済学という学問は自然科学をモデルとして生まれてきた……。自然科学者は自然や人間の肉体を観察して、そこから一つの秩序すなわち法則の支配を発見しようとした。経済学者のやり方もまったくこれと同じであった。市民社会という肉体にはどんな秩序があるのか、そこにはどんな法則が支配しているのかを知ろうとつとめたのである」(高島善哉『アダム・スミス』岩波新書一〇八頁)。

経済学がこのような自然科学的性格をもち、人間を集団としてとらえる方法に立つとすれば、他の文化諸科学、とりわけ人文諸科学のように個性をとくに重視し、個人に眼を集中していく諸学と総合研究の関係に入りうるかどうか。入りうるとすればその結合の接点はどこにあるのか。もちろん経済学といっても、理論・政策・歴史の諸分野を含む訳で、その分野によって総合研究の可能性には大小があると思われるが、経済学が全体として右の自然科学的方法に立つとすれば、むしろ逆に自然科学と総合の関係に入りうる可能性が強いのであろうか。クロード・ベルナールの有名な語に、「芸術は『私』である。科学は『われわれ』である」とあるが、前者を対象とす

る芸術学と経済学のような科学との右の差異、すなわち『私』と『われわれ』との距離はどのようにして連結されうるのか。

以下に、経済学を中心としてその自然科学的方法の特色を明かにし、次いで他の社会諸科学及び人文諸科学との接点の有無・所在を検討してみよう。

二 経済学における自然科学的性格と集団的方法の意味

① マルクスの場合

マルクスがその『資本論』において次のようにいう時、彼の「自然科学的方法がはっきりと特徴づけられる。「起りうべきもろもろの誤解を避けるために一言しておく。わたしは資本家や地主たちの姿のバラ色の面を描くようなことはまったくしていない。むしろここで諸人格が問題となるのは、ただかれらが経済学的諸範疇の人格化 die Personifikation ökonomischer Kategorien であり、一定の階級諸関係および利害のない手である限りにおいてなのである。経済的社会構成の発展を一つの自然史的過程としてとらえるわたしの立場は、他のどの立場とも違って、個々人には、諸関係——すなわち、かれが、いかにも主観的にはそれを超越しようとも、社会的にはその被造物たるにとどまるような諸関係の、責任をおわせることはできないのである」(Das Kapital, Bd. I, Vorwort zur ersten Aufl., Volksausgabe, S. 8.)。

すなわち、マルクスでは、諸個人が具体的な A・B などという名をもつ諸個人として表象される他の人文諸科学とは異って、その経済学における「生きた人間諸個人」の経済活動なり、その成果なりは、一つの自然史的な過程——「頑強な必然性をもって自己を貫徹する自然法則」 mit eherner Notwendigkeit wirkenden und sich dur-

chsetzenden Naturgesetze (Derselbe) とみなし、本質的に自然科学の方法とかわらない理論的方法を適用する (社会の運動における「自然法則」の発見) 訳で、この場合諸個人は「経済学的諸範疇の人格化」、すなわち、一定の経済的利害のない手たる「階級」としてのみ叙述される。

こうした経済学の方法では「生きた人間」が消失してしまうという批判が起こりうるが、実はこの「生きた人間」の捨象は、マルクスは意識的に意図して行っている。というよりは、彼はこの捨象は人間の最も現実的な姿を把握するために最も忠実な方法と考えているのである。その理由はこうである。もちろんマルクスも、その経済学的研究の出発点に当たって「生きた人間諸個人」の現実の活動を対象とするのであるが、こうした諸個人の「社会的な総力、すなわち分業によって制約された諸個人の協働から生ずる幾属倍にもなった生産力は、この「分業および」協働が自由意志による freiwillig ものではなく、自然発生的 naturwüchsig であるために、これらの諸個人にとって、かれら自身の合一された力としては現われず、かれらのそとに立つ一つの未知な強力として現われることになる。諸個人は、それがどこからきて、どこへいくかも知らず、したがってもはやそれを支配することができない。それはいまや反対に一つの独自の、人間諸個人の意志と行動とから独立した、むしろかれらの意志と行動をまで指導するところの、一系列の諸様相と発展諸段階をとって進行するようになるのである。これは哲学者にもわかるようにいえば、『疎外』である……』と (Die deutsche Ideologie)。すなわち、分業が各人の「自由意志による総合的な計画」の下に置かれずに、各人がそれを与えられたものとして受取るような「自然発生的性格」をもつ限り、生きた諸個人の結ぶ社会関係は、各人の意志と行動とから全く独立した客観的 (自然史的) 過程として現われ、それに照応して諸個人もその現実相において忠実に捉えようとすればするほど、「いっさいの現実の生活内容を奪われた抽象的な諸個人 (|| 経済学的諸範疇の人格化) となり、しかもそのことによ

つては、はじめて、諸個人として相互に關係をとり結ぶことが可能となっている」のであるから、経済学では生きた諸個人や諸人格ではなく、「一定の諸階級關係および利害のない手」としての人間とその社会關係およびその發展行程のみが問題となるのだというのである。いいかえれば「個々の生きた諸個人」をその主観的・偶然的な方面をも含めて、ありのままにとらまえようとするだけでは、経済学はその目的を達することができない(大塚久雄「マルクス経済学における人間の問題」川島編「人間と社会」二〇―三三頁)。

このマルクスの方法は、経済学の外部にある文化諸科学者にとって、当面の課題に關しても重要な論点を含んでいるにも拘わらず、しかもなおかなり難解な諸論点を含んでいる。とりわけ人文科学者にとっては人間をこのように捉えることには強い抵抗感が生ずるであろう。J・Sミルの語ではないが、「多くの人間を集めても、それで別の実体に変えることはない」といふ次第であろう。だがマルクスはただ単に「生きた諸個人」を「階級的個人」に無雜作に消去して了うだけではない。彼はこの「階級的個人」を「全体的個人」、すなわち眞の「生きた諸個人」に成長させるといふ方向を見据えて、このような方法を意識的に行っているのであつて、彼においても、やはり「生きた諸個人」が終始問題となつていた点を見逃してはならない。マルクスの自然科学的方法の意味と役割とがこれではほぼ明らかとなつたかと思う。

②リッケルトの場合

次に、先述のごとく、リッケルトは経済学を自然科学と文化科学との「中間領域」と考へているが、それを理解するためには、一応彼の名著『文化科学と自然科学』の主要論点を対比・較量しておかねばならない。

彼によれば、「自然はひとりで発生したもの、『生れたもの』及びおのれ自らの『成長』に任せられたものの総体である。文化は価値を認められたもろもろの目的に従つて行動する人間によつて直接に生産されたもの、ある

いは（もしそれが既に存在しているならば、少くともそれに付着せる価値のゆえにわざわざ養護されたものとして、自然に対立する」（同上書、岩波）（文庫四八頁）。彼のあげる「文化客体または文化財」は宗教、教会、法律、国家、道徳、学問、言語、文学、芸術、経済およびそれらの経営に必要な技術的手段である（同上書）。それであるから自然科学の場合には、個性的あるいは一回的・特殊なものには「非本質的」として捨てられ、自然法則の概念を発見するために普遍化（同上書）。これに対し、文化科学においてはその対象である文化の性質に従い、その事象に付着した価値ならびに価値への関係付け（これは評価、すなわち賞讃または非難とは異なる）によって「本質的」として了解され、その特殊性と個性とにおいて叙述する。これを前者の普遍化（同上書）一般化に対し、「個性化」（同上書）と呼ぶ（同上書一三七頁）。

このように考えた上で、彼は両科学の手續が相互に浸透し合う「中間領域」を第十一章で論ずる。これに含まれるものには「系統発生的生物学」などがあるが、「われわれにとつて最も重要なものは、恐らく文化科学における方法的（同上書）自然科学的（すなわち一般化的）成分である」（同上書一七八頁）から、「最も早期の発展段階にある諸文化事象と」か、比較的大きな集團の関心と意志方向とが決定的な意義を有する諸文化事象（同上書）については「多数の客体に共通なものを総括する科学的概念構成は、およそその文化意義に關してもまた本質的である」ものとして「本質的」と見ることができると考へる（同上書一七九頁）。

このような「一般化的に構成された概念内容と価値關係的（同上書）歴史的に構成された概念内容との（往々生ずる）一致のために」、研究が自然科学的方法でも、文化科学的方法でも行われる場合として、彼は、原始文化の研究、言語学、法律学と並んで「国民経済学」を挙げ、「一般化的文化科学」と名付けている（同上書一八〇頁）。

しかもそれらのうち、経済学においては「普遍的概念」が最も大きな場所を占めるといふ（同上書一八五頁）。なぜなら

ば、前にも引用したように、「経済生活の動きが一般に孤立化されうる限り、無論この場合は実際非常にしばしばただ集団のみが問題になる、したがってこの文化科学（＝経済学）にとって本質的なものは、大抵の場合、比較的普遍的なある概念の内容と一致するであろう。」^(同上書)「だからそこでは純粹に個性的なものは背景に退き、普遍的な概念的諸関係の確立が最も広い場所を占める」^(同上書)という訳である。

リッケルトはここでは経済学を個性化的科学であるか、一般化的科学であるかという二者択一の形で考えているのではなく、論理的に見て方法論的に両者とも可能であり、必要でもあると主張しているのであると、わざわざ自ら註記している。むしろ彼のいいたいところを演えきすれば、歴史学を一般化的自然科学に仕立てあげようとする試みに結びつく、国民経済学の専ら一般化的方向への動向、たとえば「唯物史観」のごときものを拒否したいということになる^(同上書一八五)。既に前項でマルクスをとり上げたので、それに関連してこの点に関するリッケルトの所論にふれておこう。

彼によれば、この「唯物史観」は社会民主主義の願望に左右されているために、「過去に関しても偉大な人格を『非本質的』と考へ、原因が大衆にあるもののみを承認せんとする傾向が存する。したがって歴史記述は『集団主義的』となる。かつまたプロレタリアートの立場、ないし理論家たちが大衆のそれと看做す立場からは、大抵より多く動物的な価値が問題となるところから、ただそれらの価値と直接の関係あるもの、すなわち経済生活のみが『本質的』となる。したがって歴史はまた『唯物的』となる。だとすれば、それは經驗的な、ただ理論上においてのみ価値へ関係づける歴史科学ではなくして、むしろ実践的に評価し無法かつ無批判に構成を行う歴史哲学である」という^(同上書一八六)。そののみか、ここでは「経済的文化以外の文化は悉く単なる『反映』^{レフレックス}となつてしま」^(同上書一八七頁)い、文化科学に「形而上学的」な解釈が、「頭と胸との理想に胃の腑の理想が取って代る」ととも

に、「人間の全發展が結局『資料場闘争』と考えられる(同上書)。これは客観性をもたぬ、「最も恣意的な歴史構成」(同上書一八八)の**一**である(同上書一八九頁)とリッケルトは結んでいる。

本稿では、リッケルトの**経済学**—自然科学的・一般化的方法の特色だけを見ればよかったのであるが、彼の唯物史観批判に若干の混同が見られ、したがって**経済学**の理解にも問題があるので、右の所論に若干のコメントを付け加えておこう。同じく西南学派の哲学の洗礼を受けており、またリッケルトと個人的にも、学問的にも親しかった「個別科学研究者」マックス・ウェーバーでは、哲学者リッケルトと異り、歴史構成の一つの方法としての唯物史観の鋭利さは充分認めているし、また**経済**が人間の一つの宿命となった近代の特色について指摘しており、さらにまた**経済学**の一般化方法の可能性に懐疑的であった。リッケルトは右に見たように、「**集団主義的**」、「**動物的な価値**」—「**唯物的**」、さらに「**実践的評価**」の三つの論点から唯物史観を批判した積りであった。

しかしながら、まず第一点の「**集団主義的**」という批判について、すぐ前の個所で彼自らも、**経済生活**が孤立化されると「**集団のみ**」が問題になるといっている。**経済学**がその方法において「**集団主義的**」たらざるをえないことは、**経済生活**なり**経済社会**の構成なりの**發展行程**を科学的に忠実に追求しようとする限りは避けることができない。したがって**唯物史観**が「**集団主義的**」であるという規定と、**経済学**で「**集団のみ**」が問題になるという規定とどう異なるかを彼自ら明確にせねばならぬが、この点必ずしも明確でない。彼のいいたいところは「**偉大な人格**」ではなく、「**大衆**」に起因するものを重視するのを「**集団主義**」と呼んでいるのであるが、既に前項にも見たように、これこそ正にマルクスが意識的に取上げた方法であり、近代の**経済学**も継承している**経済学**の**基本的方法**である。この点を認めなければ、リッケルト自体の一般化的方法の**経済学**への適用も不可能となるはずである。次に、リッケルトのいう「**動物的価値**」とは何か。動物がものに**価値**を認めうる能力があるのかどうかは大し

て重要でない問題であるからこれはおくとしても、「価値」は人間が客体に対してもつ観念であるから、リッケルトの文化価値哲学に突如として「動物的な価値」という語がとび出すのは論理上の混乱を招く。彼のいおうとする本心はこうである。人間の生活資料を「飼料」に見立てた場合、この生活資料に「価値」を認めるのが「動物的」であり、したがって生活資料を獲得する行為は「唯物的」であり、またそれは「飼料場闘争」に通ずるというのである。経済行為というものは、生活資料に価値を認め、これに対して他の物や貨幣の代償や労働なりを支出して獲得し、消費する諸行為に関して成立する概念であり、これらをリッケルトのように、「動物的」、「唯物的」と名付けるのならば、およそ経済学は文化科学の範囲に入るべき科学ではありえないことになる。

経済学が「生きた諸個人」を忠実に把握することに努めれば努めるほど、「頭と胸の理想」を主観的には抱きながらも、しかも「胃の腑の理想」に責めさいなまれる「抽象的な個人」が前面に押し出されてこざるをえない。「偉大な人格」は、この学問では「非本質的」となり、「大衆に原因があるもののみ」が取上げられざるをえないことになる。これは決して「恣意的な構成」ではない。もちろん人間が経済学の遙か向うにおく終極の目標は、リッケルトのいわゆる「頭と胸の理想」であり、そして「胃の腑の理想」の上にそれを置くことであるが、現実にはそれがどうして逆転して現われるのかを研究するのが経済学の任務といえる。経済学が「唯物的」なのではなくて、現実の人間が「唯物的」・「動物的」であるにすぎない。彼の批判する唯物史観ではなくて、マルクスが経済学の自然科学的方法と呼んだものは正しくこの点に関わっているのである。

最後に、「実践的評価」に関していえば、先に引用したマルクスの「起りうべきもろもろの誤解を避けるために一言しておく……」という語を想起するだけで充分であらう。後者にとっては個々人への評価や攻撃ではなく、個々人の組込まれている社会構成の分析が問題であった。前者の誤解に対して、後者は先取りして親切に注意を

与えているにも拘らず、前者はこれを読まなかったと考えられる。社会民主党のラッサールやテンニエスの語からではなく、『資本論』その他のものの精読の中に「唯物史観」批判の典拠を求めねばならぬことがこれでも判る。

③ 近代の経済学の場合

経済学を理論的研究と歴史的研究とに分けて、前者を精密科学とし、数学的手法を用いる傾向は、周知の通りメンガー、クールノー、ワルラスあたりから始まった。リッケルトも恐らくこうした傾向を念頭において、先述の経済学—中間領域論を立てたものであろうと思われる。このことは彼の友人マックス・ウェーバーの論著からも看取・立証されうる。もちろん数学的方法のずっと古い先例としてはフランソワ・ケネーの『経済表』があるが、そこまで論及する要はない。

まずメンガーによれば、経済学には①歴史的経済科学、②理論的経済科学、③実践的経済科学の三群があつて、歴史的科学は「経済現象の個性的本質と個性的連関とを探究し説明」する。「実践的経済科学は、人間の経済的意図が（事情の異なるに依じて）最も合目的に到達せられる原則を教えるべきものである」（メンガー『社会科学の方法』六八頁）。これに対し、「理論的科學は、經濟現象の一般的本質と一般的連関（法則）とを探究し叙述すべきものである」（同上）といっている。前二者が個性的あるいは個別の場合についての研究であるに対し、後者は「自然研究の領域において行われているように」厳密な体系を發展せしめることができるという。彼のいうところによれば、「經驗的現實主義の立場からは精密な自然法則は社会現象の精密法則とひとしく到達不可能である。本来の意味の精密自然法則も、經驗的—現實的自然研究の成果ではなくて精密的自然研究の結果である。が精密自然研究はその根本性格上、社会現象の領域における精密的研究に相似ている」（同上書）。

メンガーは、本来の経済学の重点をこの「理論的研究」に置いており、歴史的・実践的研究は、むしろ補助あ

るいは応用部門と考えている。すなわち、理論科学の実践的科学に対する関係は、「いつてみれば、一方理論的化學の化學的技術学に対する関係、他方両者の実践的化學者の活動への関係、または解剖学と生理学との外科術と治療法との関係、及び二群の科学が学問的に教養ある医者の実践的活動への関係と同じである」(同上書)といっており、また「国民經濟に関する歴史的科學を政治經濟学(すなわち理論的科學)の補助科學として、また反対に政治經濟学を国民經濟の歴史的科學の補助科學」(同上書四七一―三六六頁)と考えている。

このメンガーの所論のうち、理論と実践との関係づけの行き過ぎと、相對主義的な理論と歴史との関係づけについては批判が残るが、この立言にも拘らず、以上で彼が經濟学の「進歩」を一般的・理論的研究に重点を置いて考えていることが明白である。しかも彼は、自然科学と同じように嚴密な体系を、經濟学においても構築する可能性を信じている。つまり歴史抜き的一般法則の発見を經濟学の一つの、しかし主要な目標にしている。經濟学が、リッケルトのいわゆる個性化的方法から一般化的方法へと決定的にふみきるポイントがここに存する。とりわけ、彼がこの理論的研究において財を主觀的効用 *Nützlichkeit* について觀察し、しかもこの財の「因果連関」を特に重視しているのは、後述と関連して重要な論点である」(『國民經濟学原理』(安非訳一―七頁))。

次に、クールノーは、その『富の理論の數學的原理に関する研究』において、經濟学「研究に數學解析の公式及び符号を応用せん」(中山邦訳岩波文庫二四頁)としている。出発点において、すでにクールノーはこの方法に対して様々の非難が挙げられるのを予想して、「思うにこの僻見を生んだ理由は、一方においては、理論に數學を応用しようと考えた少数の人々が理論を眺める觀點を誤ったことにあり、他方においては、經濟学の問題については賢明にして精通せる人々が、數學には縁遠い為にこの解析に対して抱くところの誤解に基くものである」(同上書二四頁)という。たとえば、とクールノーはいう、カナルがその政治經濟学の『諸原理』で欲望や競争のような不確定的な觀念

に確定的な数学的表現を与えたのは前者の例であり、また後者の例示としては次のようにいう。「彼等の思うところはこうである。符号ならびに公式使用の目的は、単に数の計算に導くことにある。然るに看取せられる如く、「経済学」の問題はかくの如き理論のみによる価値の数学的決定には適当しない。そこで公式という要具は、たとえ誤れる結果に導く惧れなしとしても少くとも無用にして銜学的なものであると結論せられたのである。」しかし、と彼は批判する、「数学解析に長ずる人々は、その目的が単に数を計算するに止まらず、進んで数学的に表現しえざる大いさの関係を見出すためにも、またその法則が代数的記号を以て表現しえざる函数間の関係を見出すためにも、用いられることを知っている。……大いさの間の関係が問題となれる場合に、数学の符号を使用することは極めて自然である。」

したがって、仮りに「厳密に必要ならずとしても、これが読者のある人々に縁遠いがために、またそれが時に誤って使用せられるがために、これ（数学的方法）を拒絶することは、決して合理的ではない。けだしそれは問題の叙述を容易にし、これを一層簡潔ならしめ、さらに広き発展への道を開き、また漠然たる討論の邪道に入ることを防ぐことができる。」こうして「富の理論は……、単に一定の条件を満足するに過ぎない不定形の函数を取扱う解析部門に依頼するものである。これ余がこの論著において確定せんと欲するところのものである」(同上二四頁)。^{一七頁}。だが、クールノーはいう、「余は決して、政治経済学の独断的なるまた完全なる論述を試みようとはしない。余は数学的分析を適用しえない問題、あるいはまた既に充分解決せられたと思われる問題は措いて問わな^い」(同上二七八頁)と。この点クールノーは、今日の経済学における数学万能主義者とは異り、極めて慎重である。だが、このクールノーの数学解析の富の理論への応用は、かれが考えるように、単に数学と経済理論との結び付きの、あるいは叙述方法の簡便化の問題に尽きはしない。クールノーの学問的興味をこえる時代的背景や彼の

時代の社会経済構造の変化を考慮に入れ、また社会科学として極めて現実的な社会・経済問題に当面せねばならぬ経済学という科学の性格を顧慮してみると、クールノーの方法が経済学の理論的（＝実践的あるいは政治的な問題からの）逃避ないし回避であることが把握される。この断定を許す判断の典拠は、彼自身が与えてくれる。「本書は断じてある体系を支持するために書かれたものではない。またある党派の旗下に参ぜんとするものでもない。いな余は理論からその政治上の応用への途は、甚だ遠いことを思うものである。したがって、かくの如く感情的な論争と交渉するところなしとするも、それは決して理論の価値を失うものではないと信ずる。かくてこの著に何等かの実際の価値ありとするならば、それは主として、日々大胆に決定せられている多数の問題が原因の充分なる知識を以て解決することの、いかに困難なものであるかを明白にすることに存する」（同上訳）。この所論は、経済学が社会科学としてもつ高度に実践的な性格、あるいはその対象のもつ日常的性質のゆえに、いつも政治や実践の側から理論的に要求や批判を受けることに対する経済学者のアカデミックな回避的態度、あるいは理論的無責任主義を表明したものである。けだし経済学理論を数学的解析の方法や「大いさの関係」という対象に限定する方向は、経済学を現実の社会・経済問題から遠ざけ、現実に対しての理論的責任をなくするという意味で極めて有効だからである。理論と政治的応用との間の遠い距離こそクールノーが求めた方法論上の目標であった。

彼のいわゆる「大いさの間の関係」に関していえば、これはかつての「価値論」から「貨幣的経済理論」への移行を意味する。経済学における価値論（これは単に経済的価値の論理的・概念的せんさくの論議ではなくて、本来は経済社会の構成に関する最も根本的な理論的研究であった）を単なる効用による心理学的価値論（主観価値学派）や、あるいは価値論否定＝価格論への移行に向けていく理論的動向は、近代社会における十九世紀から

二十世紀にいたる諸社会問題の鋭い激化の過程における経済学者の理論的対応と政治的中立化とを忠実に反映しているのであって、それこそ諸人格の経済的範疇の人格化、あるいは抽象的諸個人への変化と対応していると、マルクスならばいうところであろう。これを補足していえば、クールノーのいう「数学的解析に長ずる人々」と経済学者との一致は右の「抽象化」過程の経済学理論における現われであり、そもそも出発点において、人間と人間との関係を、物と物、あるいは価格を媒介とする函数関係（クールノーの「大いさの間の関係」）におきかえるという理論的仮説あるいは前提が成立するためには、人間が所得の大いさによってのみ人間となりうる経済関係、あるいは一定の条件を与えられれば、経済原則にしたがって必然的に特定の反応、経済行為を示すと考えられる、文字通りの「経済人」*homo economicus* としての人間の社会関係がまず与えられていなければならない。まさに人間の抽象化がそこに現われる。

だがわれわれは、これ以上クールノーに深入りする必要はない。ただ数学的分析を応用することがクールノーが天文学などの比喩を用いるに見られるように経済学を自然科学（理学）に接近せしめる所以で決してないことに注意しておきたい。数学は科学上の分類からみても、経済科学である自然科学というよりは形式論理学ないし記号論理学と同一範疇の形式科学に属するもので、人間の思惟を数や記号を用いて節約する手段でしかない。自然科学においては物理学のごとき、極めて精緻・高度な数学を応用しはするけれども、数学を応用・利用すること、自然科学の本来もつところの一般化的方法の手續とは同一のことではない。一般化には生物学のように言語による類概念を用いる方法もあるし、化学のように記号をも用いる方法もありうる。しかしながら経済学で人間関係を「大いさの間の関係」におきかえ、思考を簡便化するために数学を利用する際には、その半面に経済社会の最も重要な要因である所有関係や生における社会的関係、それと密接に結びつく政治との関連など、歴史的に

形成されて来た諸社会要因（最も基本的な要因）が完全に脱落して、経済学の社会科学としての性格が全面的に脱色されることになる。「経済を対象としない経済学」というのは「経済学という自然科学」と同様に語の矛盾である。クールノーもその語の最後に、経済学的不可知論を表白しているが、にも拘らず「理論の価値を失うものでない」というが、恐らく「政治への応用から遠ざかっている」という安心を与えるという理論的価値であろうか。

さいごに、メンガー（及びゴッセン、ジェボンズ等）による価値、需要における主観的・心理的要因の重視と、クールノーにおける数学的理論との二つの方向を総合しながら、ワルラスの一般均衡理論に基づく「純粹経済学」が成立して来る。彼は経済現象のあらゆる部分を一の大きな公式の中に包含せしめようとし、「一方において最大の全効用と他方価格——生産市場における生産物であろうと、サーヴィス市場におけるサーヴィスであろうと、資本市場における所得であろうとを問わず——とは、したがって常に経済的利益の世界をそれ自体秩序を保たしめる二重の条件である。恰も引力が量に正比例し、距離の二乗に逆比例して天体運動の世界をそれ自体秩序づける二重の条件であると全く同じく……この二つの場合において二線の公式が全体の科学を包み、そして個々の多数の事実を説明するのである」という（*Economique*）^(Pure, p. 306)。

もう少し詳しくいえば、彼が想定する（純粹な）全体経済社会においては、二つの市場（用役||サーヴィスの市場と生産物の市場）が相並んで存在するが、その各々において価格は次の三つから成る法則に支配される。

- ① 同一市場においては、同種同様の生産物にはただ一個の価格しか存しないこと。
- ② この価格は需要と供給の数量が正しく合致せしめられるような価格であること。
- ③ またこの価格は最大多数の売手と買手とに対して最大の満足を与えるようなものであること。

ワルラスのいつているところは、マルクスのいう等価交換あるいは価値法則と同一の現象をいつているにすぎないように見えるが、しかし立論の建前は全く異っている。たとえばサーヴィスという時は、それはマルクスのいわゆる生産的な労働力商品だけではなく、さらに不生産的といわれるあらゆる労務提供や芸術家、教師の役務からメイドの用役などをも含む。とにかく所得を生む限り、したがって有効需要に転換しうるものを一切合財含めていいる。このように、物質的生産を行う労働者を理論の前提から脱落させれば、生産における資本と賃労働の社会関係は経済の世界から消失し、用役の価格と生産物の価格とは、等しい資格で一定額の価格として関係をもち、等質化され、経済の世界は人間と人間との関係ではなく、物やサーヴィスの価格の関係、すなわちクルノーのいわゆる「大いさの間の関係」に転換させられる。ここではそれぞれの売手と買手との間における競争の對抗関係があるだけで、それも自然に所得の大いさによって解決される「一般均衡の純粹経済」が出現する。完全な均衡が実現する絶対自由競争の下では正常利潤はゼロとなる。だがここにいうワルラスの正常利潤は、平均利潤のことでなく、むしろ超過利潤のことであって、生産物価格と一致する生産費の中には、すでに資本の提供する用役の価格という形で「利潤」(これが平均利潤)が含まれているのである。

それはともかく、ワルラスにおいては、その一般均衡論は、ニュートンの引力の法則に擬せられ、天体の均衡となぞらえられているが、ここに「経済学||自然科学」化の傾向はその極致に達している。と同時に近代の経済学理論の数理的体系はほぼここに確立されたとみてよい。

三 諸社会科学の方法とその総合

社会科学にはいうまでもなく、経済学の他に、法学、政治学、社会学(あるいは経済学の前身または分身とし

ての商学・経営学・会計学)などがある。このうち社会学などは比較的に方法の上で自由な立場に立ち、自然科学的手法や比喩を用いてその研究を進め、また数学的記号による説明が行われる場合が多かった。しかし法学や政治学では、いわゆる言語による記述的 *descriptive* な方法が用いられる。法学の場合、とくに法律の規定、文言を中心とする法解釈にせよ、各国法制を比較する比較法学にせよ、法制史的研究にせよ、言語を除外して成立しえない学問分野である。政治学の場合も、数学的な記号の利用の上には成立し難い。会計学も数字を扱うとはいえ、そう複雑な数学を利用する訳ではない。経営学では最近時に至って経済学と同じように計量的手法が利用される分野も生じている。このように社会科学と一口にいても、様々な方法上の差異が見られる。

ところで社会科学の発生史の上からいえば、近世初頭のいわゆる道徳学、あるいは道徳哲学の全体系の中から法学や政治学、そして次に経済学が分化して来たのであり、社会学は最近世になってから確立した科学的分野である。それは法学・政治学・経済学などがとり残していった諸問題を対象とする学問であるともいわれている。これらの中で、経済学が最も高度な社会科学として発展していったのであるが、その原因は経済現象が多分に数量的な表現を許容する部分を有し、また社会諸現象の中で経済的要因の占める比重が近代の経過中に益々拡大したという点に求められる。このことはスミス『国富論』成立以前に、一国の経済循環を見事な一表にまとめたケネーの『経済表』を見ても判然とするが、近代社会が貨幣を媒介とする交換関係を進展するに従い、益々その可能性を増大した。

だがしかし、この経済学の発展は、経済現象を純粋な一定の静態的モデルの中で操作する方法の確立によって与えられたものにすぎず、長期の歴史的経済現象の一部としての近代経済社会の諸問題を把握しようとする場合にはこの方法だけではどうにもならないのも事実である。したがって経済現象を単に純粋理論的に究明するだけ

ではなく、高度な「理論的—歴史的」水準において究明する作業も必要となる。もし経済学が最近の発展に見られるように、益々社会的性格を稀薄化し、記号論理学化していくとすれば、経済学と他の諸社会科学の総合などと簡単に比べても、その総合には多大の困難がつきまとわざるをえないことを、卒直に認めねばならない。とりわけ経済学の諸分野間においてさえ、その総合はいくほど簡単ではない。

経済学に高度な政治性を有する分野 *political economy* と形式的な理論分野 *economics* とがあるとすれば、他の社会科学と結びつき、その総合の可能性を有するのは前の部分である。前の場合ならば、既にスミスにおける道徳、法、経済の三つの世界の結びつきが示すように、その総合への途は比較的容易であろうと思われるが、後者の理論的な分野は、実質的な権力、血縁、所有、犯罪、憎悪、制裁などの関係を内容とする人間関係を扱う法学や政治学と到底結びつきようがない。したがって社会科学間の総合といっても、もはや内田氏の指摘される「素人になる覚悟」だけではどうすることも出来ない困難が生じて来る。

残されている経済学と他の社会科学との総合への可能性としては経済史学か、経済社会学を通じて総合する途がある。この場合ならば、同一の具体的な社会現象をそれぞれの側面なり、問題意識なりに従って眺めるだけであって、抽象的な函数関係と具体的な経験的観察という理論水準の高低はさほど生じないからである。

最後にこの場合の総合の問題について一言しておく、経済学に数学的分析が導入せられたからといって、ワルラスのいう如く経済学が自然科学と等質になったとか、あるいは（まじめにそんな事を考える訳はないと思うが）自然科学と総合の関係に入りうるとか考えるのが、全くナンセンスであるのと同様に、理学、とくに数学を修めた人々（クールノーのいわゆる「数学解析に長ずる人々」）が経済学者にすぐ転換しうると考えるのもまたナンセンスである。決定的なポイントは人間関係に関する鋭い歴史的感覚と社会科学的な洞察力と、要すれば文化

一般に対する深い思索をもつことであり、これらなしには、終極的には経済の問題は到底充分に理解することができない。この点について近代の経済学者の大家ヨゼフ・シュムペーターの少し長いが、しかし傾聴に値する語に聞こう。

「最新の論考自体が最小限度の歴史的側面すら提示していない場合には、それがいかに正確であり独創的であり厳密であり、また優美であっても、方向と意味とにおいて欠けている。」なぜか？「第一、経済学の対象たるものは、本質上歴史的間時における一つのユニークな過程である。何びとといえども歴史的事実を十分につかんでおらず、歴史的センスあるいはことばを換えていえば、歴史的経験とも呼びうるものを必要な程度にもっていないならば、現在をも含めて、いかなる時代の経済現象をも理解できまい。第二、歴史的な記録は、本来純粋に経済的たりえず、当然その中に純粋には経済的でないような『制度的』事実をも反映せざるをえないものである。従ってそれは経済的事実と非経済的(法的・政治的・社会的・宗教的その他……引用者)事実がいかに関係しているか、また各種の社会科学がいかに関連すべきかを理解する最善の方法を供するといえよう。第三、私見によれば、経済分析において、今日犯されている基本的誤謬の大多数は経済学者が具備せる他のいかなる用具の欠陥に基づくというよりも、まさに歴史的経験の欠如に基づくことか、はるかに多いというのが事実である」(『経済分析の歴史』(東畑他訳、第一卷))。

当面の総合の問題にとって、何が大切なポイントであるかを鋭利に指摘する重味をもつ巨匠の語である。彼のいう「歴史的経験」という語句のもつ味わいが再三再四味読さるべきである。

四 文化諸科学と経済学との接点

こうしたことは、社会科学間だけでなく、人文諸科学といわれる宗教学・哲学・史学・文学・芸術学・文学な

どとの間についてもいいうることであるから、ここでは問題を終極的に拡大して経済学と文化諸科学との総合の問題に入らうと思う。

ところで文化諸科学の方法の特色は、先述のリッケルトによれば、個性化、すなわち文化諸現象をその特殊性と個性において叙述することにあつた。この場合、特殊的、個性的といわれるものは、人間の作り出したものにある価値（文化価値）を附着して、これをその価値に関係づけて理解するという作業の下におく。

では一体文化価値というのは何か。哲学の一分科である価値論において、価値には一般に真・善・美・聖などがあげられる。しかしさらに、富・力・秩序（あるいは正義）なども人間の追求する価値であらう。真は事物、対象の本質、実相、真実を究めようとする人間の理想を指し、美とは形相に現われた調和や躍動の追求であり、善は人倫を支配する精神的調和の探究であり、聖は人間を超える超越的な万能の力、存在に対する畏敬の表現である。富はこの世での物質的な生活の豊富さへの願ひであり、力は他を支配する志向の表現であり、秩序は社会生活をなす人々の間における調和への希求である。それらの諸価値はいずれも人間のもつ目的・理想を極めて抽象的、純粹に現わす観念であるとともに、人間の文化諸活動を支える導きの糸である。

こうして真を追求する者は学問に向い、哲学や諸科学、あるいは文学に赴く。また美を追求するものは絵画、彫刻、音楽、詩などに向う。善を目標とする活動は倫理的な文化活動、教育、社会事業などに志向する。聖を目指すものは宗教活動に身を捧げる。富は実業を力は、政治活動を、そして秩序は立法、司法などの活動を導く。個々人の事業、活動あるいは作品の高き、低きはそれぞれの価値にしたがつて評価されるが、しかしこれらの諸活動を文化諸科学が対象とする時は、単なる高低の評価ではなくて、これらの価値に関係させて各々の文化現象の意義、性質が理解される。これが文化諸科学の中心問題である。

ところでこれらの価値は、理想や目的を意味するといっても、人間が自ら作り出したものであって、その意味で長い人間の幾世代に亙る生活の中から生み出されたという歴史的な性格を第一次的にもつ。それらはとりわけ近代に入って右のような様々の価値理念として定立されたものである。かつては学問の目標は、神話や形而上学や錬金術や神学の中に埋れていて、それは真理ではなかった。美も単なる装飾や宗教的荘嚴化と混同していたし、善の理想ももつと集団的な強制や習俗、禁忌などの間に眠っていた。聖の目標も、生産と直接関連を有する民間信仰の中に混交していたし、まして富は貨幣などではなく、土地や家畜の大きさでしかなかった。力も直接集団的な現われ方をしていて、秩序も同様であった。これが今日のように真・善・美・聖・富・力・正義などという抽象的なものに集約されたのは、歴史の進行の帰結であった。

また他方で右の文化諸価値は、歴史的であるが故に社会的でもある。なぜならば、歴史は本来、個人から個人への連り(これは系図である)を指すものでなく、社会から社会へ、時代から時代への移行の上に成立する。それゆえ、例えば宗教史、美術史、科学史、文学史、音楽史などの「歴史的な性格」は、それぞれの文化領域が、一定の歴史、社会の中で展開し、その中でそれぞれの固有の文化価値をより明かに発展せしめるところに成立し、個人の活動や個々の作品が時間的に羅列されるのみでは「年表」でしかないといわねばならない。いわゆる手法や技術の継承は技術の伝承であって、それ自体では文化価値の社会的継承・発展を意味しないから歴史とはいえない。文化価値が社会的であるとは、文化価値が特定の時代において支持社会層をもち、あるいは特定社会層の理想が文化価値であることを意味している。個々の人間のもつ理想や目標はそれ自身では、単なる個人の趣好であり、文化価値とはいえない。それが文化価値となりうるためには、その個人の理想が、その時代の諸社会層の念願や理想を具体化していることが必要である。ただ歴史上、時代の承認や共鳴をえていない個人的な理想が、

後に文化価値の指標となる場合があるが、これは擡頭つしつある新しい社会層の念頭を文化的天才が指示し、先導する場合であって、やはりこの場合でもその社会的連関を否定するものでない。

このように文化諸科学が対象とする文化諸領域には、その中心となる文化価値があつて、それは歴史的性格と社会的性格をもつものとして現われる。個性的側面が重視される所以である。経済学はリッケルトも見るように、歴史科学であり、社会科学でもあつて、文化科学としての個性的性格を高度にもつと共に、他方経済学の一般的理論に裏打ちされた歴史的考察と社会的把握をもつ。つまり一般化の側面をかねそなえる部分が他の諸科学に比し大きいので、経済学と他の諸科学との総合には、一種の媒介が行われる要がある。例えばクールノーやワルラスに見られるような、歴史も、階級も捨象された経済学理論の世界を、直接他の文化諸科学の対象とする世界につなぐことは出来ない。理論の平面が異なるからである。そこで経済学をもう一步広げて経済社会学、すなわち階級と身分との双方を含む社会層をとり扱いうる平面にまで行き、そこから他の諸文化科学への連絡をつけるという間接的な操作を行わねばならない。経済学側でこうした経済社会学への足がかりを与える分野は歴史的研究であると考えられる。

現在までのところこうした総合の可能性をもつ学問的遺産として、は古くはスミス、マルクスの政治経済学の諸体系、新しくはマックス・ウェーバーの学問体系があるのみであろう。文化諸科学の総合の問題に入ろうとすれば、どうしてもこの巨匠達に立かえり、そこから問題を出立させる必要があると思われる。というのは社会科学の細分化を推進める方向では、もはやこうした学的遺産には何等見るべきものなしというるけれども、社会学や広く文化科学間の総合という問題視点に立てば、どうしても経済学の理論・政策・歴史の三部門ばかりでなく、広く社会、文化の全面に互る巨視的なヴィジョンをかねそなえる体系を足がかりにせねばならない。と

りわけ宗教と経済との関連をとり上げたウェーバーの宗教社会学ないし経済社会学は、単なる「社会学」などではなくて、特定社会層のもつ物質的・観念的利害関心のあり方を分析する極めて壮大なスケールをもつ社会科学的業績である。

五 結 び

以上、われわれは経済学の特殊な科学的性質を考察することから始めて、経済学と他の社会科学や人文科学との総合の可能性を検討してみたのであるが、ただ心残りなのは右の検討が全く理論的にのみ行われて、この接点の確認が具体的な歴史的分析の上に十分に据えられていないという点である。というのは、もし選ばれた方法が有効でなければ、具体的な歴史的分析が文化の総合的な把握に到達しえないということになる。したがって、方法上の反省と具体的研究との双方を繰返し行って、この仮説をたえず確認するトライアルズ・アンド・エラーズの過程が必要であることを最後に付言しておかねばならぬ。なお、この方向でのささやかな試みが、各国の「市民階級」を扱う一連の拙稿によって果されるはずである（例えば「オランダの市民階級」大阪府大歴史研究一一号所収及び「スペインの市民階級」本誌一四巻四号所収を見よ）。（初稿一九六八・二・二七）

付記 この研究は昭和四二年度文部省科学研究費（総合研究）による研究課題「近世ヨーロッパ文化の総合的研究」のための作業の一部で、主として人文科学に携わる人々から成る研究打合せ会で報告したものに加筆した。したがって専門の経済学者にとっては、いわずもがなの論議が多いことをお断りしておく。